

池上義信先生と飯豊の黒百合

高橋 庄一

昭和32年度の弥彦登山祭の記念講演を、池上先生に弥彦の植物の話をお願いしようと決まり、峡彩山岳会初代会長の山岸栄三郎氏と二代会長井口正男氏と小生の3人で夜、先生の水島町のご自宅をお願いに行ったところ快く引き受けて下さり一安心した。

小生がお供した山岸、井口の両先輩、それに池上先生も鬼籍に入られた。尾崎先生に話したところ、どうせ弥彦へ行くなら早く出て、ドンジの池や砂丘地帯の植物採集をしようと言うことになり、池上先生も賛成とのことで、弁当持ちで出掛けることになった。現在は、登山祭は7月25日と確定しているが、当時は日が確定しておらず、その年は7月11日に行なわれた。多分尾崎先生の車で出掛けたものと思う。32年は小生未だ免許を取得していなかった、と言うより、あった免許を車を持っていなかった為、書き替えを忘れ、失効させたままであった。

砂丘湖であるドンジの池で池上先生にヒメヤブランを教えて頂いたことは、今でも憶えている。あちらこちらと採集を続けて、弥彦山頂へ着いたのは午後3時頃であったろうか。講演が始まる迄はご厠所の東手に、先着された藤島玄先生の一団が一服されていた。そこへ我々も合流し、池上先生もおられることもあり、談たまま飯豊の高山植物の話になり、飯豊に黒百合が在るか、無いかの話になった。藤島玄先生は「俺は実際この眼でみている。他に何人も見ている人を知っている。確実に飯豊に黒百合は在る」と力説されるが、池上先生は「立証されない、しかも証拠になるものが何も無いものは認めるわけにはゆきません」と涼しい顔をしておられる。玄さんは、最後に顔を赤らめて、「俺が在ると言えば、在るんだ」と話に力を込めて話しておられたが、池上先生は最後まで認められず、結局、飯豊の黒百合論争は水掛け論で終わってしまった。

植物界の権威の池上先生、山岳界の大親分の藤島玄先生の水掛け論は見物であったが、両方に首を突っ込んでいる小生は、唯々困惑するのみであった。飯豊へは何回も登っているが、黒百合は見たことはなかった。後日、藤島親分の書齋へお邪魔したとき、黒百合の話になり「俺は飯豊で何回も黒百合を見ている。池上みたいなあんな頑固でわらかず屋の学者はあったものではない。高橋お前よく言っておけ」と玄先生からお叱りを受けた。あろうが、なかろうが、どうしても良いことで俺が叱られたんでは合った話ではない、とその時はつくづく思った。厄介な事になったものだ、と唯々困惑するのみであった。

池上先生、藤島玄親分両方の顔を立てるにはどうすべし、と思案投げ首で考えても名案は浮かばない。思い余っ

て齊藤三代目会長に行きつけのトンちゃんて飲みながら相談したところ「簡単な話らねか、在るか無いか、お前行って見てこいや」とあっさり片付けられた。後日、池上先生からも「飯豊の黒百合の件、決着をつけるのは、あんたしかいないよ」との注文を受けた。斎藤先輩は簡単に「行って見てこいばいいねっか」と言われるが、あの広い飯豊の何処へ行って見てこいばよいか、又いつ行ったらよいか、見当もつかない。飯豊の黒百合の情報を集めようと、30数年以来の岳友本望英紀氏と作戦を練った。咲く時期と点として場所の情報を掴むにはどうするか。それには多数の人の眼で見た情報を集めようと結論が出て、JAC越後支部総会、新潟県山岳協会の総会に一席ぶちあげ、黒百合情報の提供を呼び掛けた。33年の各総会から呼び掛けたのであるが、なかなか情報は引掛かってこない。二三引掛かってきた情報があったが、何れも黒百合ではなくコシノコパイモであった。徒らに歳月が流れ、その間、毎年、年1二回のペースで飯豊へ登って見たが、黒百合にお目に掛かることはなかった。飯豊に黒百合は無い、との結着が出掛かった昭和56年7月2日夜10時頃、峡彩山岳会会員で、弥彦の麓に在住のBY氏から「今、飯豊から帰って来た、黒百合がいっぱい咲いていました」との情報提供があった、証拠になるものを持って来たか、と確認したところ「言われた通り証拠物件はバッチリ持って来た」との事。すぐさま本望氏へ連絡。2人で弥彦、麓のBY氏宅へ向かった。証拠物件を確認したところ、間違いなく黒百合であった。藤島玄親分の説が正解であった。夜、遅かったが、玄先生に飯豊の黒百合確認の電話を入れた。「やっぱり俺の言った通りらる」と玄さん大喜びであった。BY氏より正確な場所を聞いたところ、十文字鞍部から梅花皮岳迄の登山道の両脇にびっしり在るとの事。又、梅花皮小屋の廻りにも結構な数があるとの話を聞き、そんなにいっぱいあるのかと狐に化かされたような気がした。

20数年、探していた黒百合が、そんなにいっぱいあるとは信じられず、本望氏と相談。すぐ見に行こうとなり、家へ帰ったのが朝二時過ぎで、石運び沢を駆け登るピッケル、アイゼン、ザイル等の準備をする。朝方であるから、当然カカサは寝ている。冷蔵庫の中のすぐに食われるものをビニール袋に入れ、ザックに詰め込んで家を出たのは朝、三時少し前であった。本望氏と合流、早朝の113号線を車で飛ばす。茂助堰堤に到着。しばし仮眠をとり、午前5時、夜があけたので出発。沢沿いのレベル道を進み入り、門内沢出合い付近より雪溪に取りつく。梅花皮小屋が見える。石運び沢下部でアイゼン着用。ピッケルとアイゼンを

駆使して、急な石運び沢の雪渓を登る。小生はモリブデン鋼製の10本爪アイゼン。ピッケルは門田のベルグハイル。本望氏は門田の鋼製の8本爪アイゼンに無銘のピッケル。重さは鋼鉄製の半分も無い。本望氏が遅れ始める。「高橋さん、今日は調子が良さそう」と言うが、約10才若い彼が遅れるのはアイゼンの性能差にあるらしい。モリブデン鋼製10本爪は軽く、足に重さは殆ど感じなかった。小屋着後、ツアッケの鋭さは少しも衰えていない。今年は残雪が多いと、2人で登るべき最後の急斜面のルートに登山者の眼で観察する。左へ左へとルートを探り、梅花皮小屋の前へボンと飛び出ようと雪の急斜面を登る。喘ぎながらの登りが続き、ボンと飛び出たのは、計算通り梅花皮小屋の前であった。午前10時半であった。石運び沢の登高に5時間半も費やす。我、老いたり、である。重いアイゼンを着用していた本望氏も、だいぶ疲れた様子。小屋で小憩後、小屋周辺から黒百合を探す。探さなくてよい。小屋の周りからBY氏の話の通りいっぱいある。北股岳への登り口から梅花皮岳迄の登山道の両脇にもいっぱい咲いていた。これだけ在れば当分、飯豊の黒百合の絶滅の心配は無い。梅花皮小屋や北股岳、梅花皮岳を背景にいった証拠写真を二人で撮影し、数をかぞい始めたが、あまりにも多く、止めた。梅花皮岳頂上、12時15分着。小屋に戻り、1時50分梅花皮岳を後にする。雪が緩んでいるから落石に気をつけよう、と話し乍らグリセードで石運び沢を素っ飛ばす。雪渓の下りは快適の一語に尽きる。地竹沢付近で雪渓が終わり、レベル道が疲れた体には長く感じられた。午後5時15分茂助堰堤到着。飯豊山荘で入浴。家路へと急ぐ。写真も十二分に撮れ、最高の天気と良き友に恵まれた最高の山行であった。

飯豊の黒百合論争を解決出来た満足感と快い疲労感で晩酌の味は最高であったが、無断で山へ行った事へのカカサの小言はうるさかった。翌日、早速池上先生のお宅へお邪魔し、証拠物件をお届けした。大変喜んで頂き、これで黒百合の分布地図が塗り替えられる、と喜んで頂いて、嬉しかった。数日後、新潟日報から飯豊の黒百合の事で取材を受けたが、後日、日報より環境庁へお伺いを立てたところ「飯豊で黒百合発見」の記事を発表するのは好ましくない、とのことですのでボツとします。代わりにコラム「私の一枚」に飯豊の黒百合のこと、写真と共に書いて下さい、との依頼をうけた。小生の書いた綴り方を、藤島玄先生が校正されたのが新潟日報に掲載されたが、カラー写真であった為、日報紙上では不鮮明な写真で大きな失敗をしたと思った。新聞紙上での写真はモノクロに限る。飯豊の稜線の黒百合は、雪の下で蕾を用意し、雪消えと同時に開花し、花が終わると1週間か10日で地上部が溶けて無くなるのではなかろうか。植物の先生方が飯豊へ入られるのは7月下

旬から8月上中旬であろう。その頃は地上部が溶けて1本も見当らない。植物の先生方の眼にふれるチャンスが無かったわけである。稜線の雪の消え方にも依るが、6月下旬から7月上旬の20日位が鑑賞期間である。北海道産の黒百合は毎年順調に殖えるが、飯豊のものは3年、生かしておくのがやっとであった。

飯豊の黒百合を日帰りで見に行ってから24年の歳月が流れた。小生も50前で今より若く、膝も腰も痛くなく石運び沢を駆け登ることが出来たが、現在は全く駄目。膝が痛い、腰がやめるの毎日で、寄る年波には勝てず、情けないことである。初代梅花皮小屋の基礎工事現場で拾った荒縄を地下足袋に巻き、事故で亡くなった岳友倉島正吉氏と、アイゼンもピッケルも無しで地下足袋のまま石運び沢を登り降りした20代の体力が懐かしい。池上、尾崎の両先生、藤島玄先生を始め多くの先輩達が鬼籍に入られ、時の流れの無情を痛感させられる昨今であるが、20年弱の残りの持ち時間を有効に活用し、枕頭に待てるであろう倅やカカに、「面白かった、有り難う」と、お目目を睨りたいと願っているが、こればかりはどうなる事やら判らない。

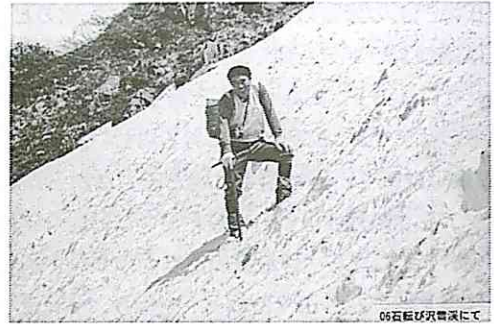
(日本山岳会越後支部)

126～127頁の写真は高橋庄一氏が飯豊の黒百合の分布確認のために飯豊山(梅花皮岳)に登頂した記録です。

飯豊山梅花皮岳の黒百合



飯豊山石運び沢雪溪 (1981. 7. 3)



飯豊山石運び沢雪溪の高橋庄一氏
(1981. 7. 3)



飯豊山石運び沢雪溪の高橋庄一氏
(1981. 7. 3)



飯豊山梅花皮小屋前で本望英紀氏と高橋庄一氏
(1981. 7. 3)



飯豊山梅花皮岳稜線のクロユリを撮影 (高橋)
(1981. 7. 3)



飯豊山梅花皮小屋と北股岳の稜線
(1981. 7. 3)



飯豊山梅花皮小屋のクロユリ



飯豊山梅花皮小屋の
高橋庄一氏
(1981. 7. 3)



飯豊山梅花皮岳稜線に群生するクロユリ (1981. 7. 3)



飯豊山梅花皮小屋とクロユリ (1981. 7. 3)



新潟日報 “私の一枚” (1981. 8. 12)

飯豊山の黒ユリ

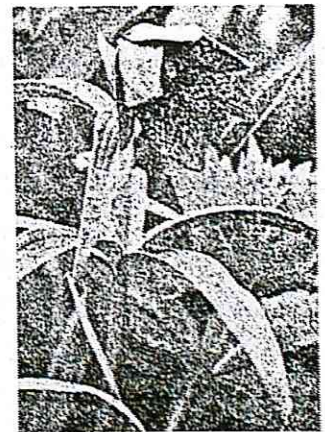
高橋 庄一

二十年前から、見て過さる越後の岳人と、実証を重んずる植物の先生の間、黒ユリの正か誤かの論議があった。山と草の両方に首を突っこんで居る私は、いままで見てはいないが、重要な宿題だと思っていた。先輩たちの話を総合して、残雪末期が花時だと、その場所も絞られてきた。多くの岳友に「飯豊の黒ユリを見たら知らせて下さい」と呼びかけていた。

今夏、映彩山岳会の友より、電話で黒ユリの便りがあった。心躍らせし、日と飯豊に向かうことにしたが、仕事の都合がつかず、日帰りでも最短距離の石転ビ沢を往復と決めた。会員の友と二人で、早朝、新潟をたつ。雪で埋もれた石転ビ沢大曾溪を、稜線上の黒ユリに思いを馳せつつ、ただ黙々と登る。

初夏とはいえ、雪渓を渡る風はまだ冷たく、行き交う人もない。仰ぎ見る門内、北股、梅花皮(かいらき)岳の主稜上の山々は遥かに高く、アイゼンのきしむ音だけの登面が続く。十時半、主稜上に立つ。

カメラ片手に、待望久しき黒ユリの花を探し始める。ほどなく三本、五本と草原の中の小群生をなす幻の花が見つかる。草丈約二〇cmの茎頂部に淡紫色の花を、二個つけていた。アイヌの歌に残る、恋の花である。地面に腹ばいになり、ファインダーを通して見る花は可憐でもあり、美しくもあった。



飯豊の黒ユリ／撮影・高橋庄一

越後側からの卓越風は強く、黒ユリの花茎は瞬時も止ることがない。この可憐な草茎からは想像もできない、強靱な生命力を秘しているからこそ、この二千以上の高所の風雪に耐え、毎年美しい花を咲かせてきた黒ユリへの想いが、今一氣に爆発した思いであった。

北方の千島、樺太から、南下しつつ高度を上げて加賀の白山まで分布するこの草が、積雪量豊かな飯豊連峰にもあって当然だが、四、五日の短い花期、花が終れば地上部が溶けて無くなる草だけに、ごく限られた山の人たちの目を惹かせてくれたのである。心ゆくまでカメラにおさめ、十四時、別れを告げた。宿題を果し、大きな喜びを背にして、満ちたりた気持ちで、石転ビ沢を下る。ふり仰ぐと北股岳は鋭く大きく峻立していた。

帰宅後、ラボよりプリントが届くのが待ち遠しい。新潟植物界の権威、池上義信先生に見ていただいた。黒ユリの二倍体タイプと確認を得た。先生にも喜んでいただき、ほんとうに嬉しかった。(越後支部)

JAC “山” (1981年11号)